

## 世界の労働関係研究所・資料館・図書館(3)

ヤングスタウン州立大学労働者階級研究センターと労働者階級研究大会

五十嵐 仁

---

### はじめに

私は、2002年5月16～20日、「労働者階級研究大会」に出席するために、ヤングスタウン州立大学<sup>(1)</sup>を訪問した。この「大会」はヤングスタウン州立大学労働者階級研究センター<sup>(2)</sup>の主催で開かれたもので、センターを訪れて話を聞くこともできた。

このセンターは労働者階級の生活と文化に関するこの種の研究機関としてはアメリカで最初のもので、ニュースレターの発行やこのような「大会」の開催などを行っている。書庫もあって文献目録も作成しているようだが、見せていただく余裕はなく、資料館や図書館の紹介ということにはならない。しかし、このセンターも「労働関係研究所」の一つであり、「海外研究事情」を紹介するという意味もあるので、このセンターを含めて「労働者階級研究大会」の様子を紹介することにしたい。

「大会」は、5月16日の夜から始まる。この日の早朝、鳴り響く電話のベルの音で目を覚ました。電話は航空会社からで、予定していた便は機体の整備不良で飛行中止になったから、それよりも早い便に乗って欲しいという電話であ

る。

急いで飛び起きて支度をし、何とか飛行機に間に合った。しかし、これでヤングスタウンに着いたわけではない。ボストンからヤングスタウンへの直行便はなく、デトロイトで飛行機を乗り換えなければならない。飛行機を早めたため、予定より2時間も早くデトロイトに着いてしまった。

デトロイト空港で乗り換えた飛行機は、この航空会社が就航させている一番小さい飛行機「Saab 340型」の双発プロペラ機で、34人乗りである。ヤングスタウンの飛行場には、私たちが乗ってきた以外に飛行機はなく、まさに田舎の飛行場そのものだった。ここからは初めてリムジンのタクシーに乗るという体験をしながら、宿舎である大学の寮に到着した。煉瓦造りの4階建ての建物である。

大学はもう夏休みに入っており、学生は帰省している。空いている寮がこの「大会」参加者の宿舎に提供されたというわけである。空調が利かず少し寒いということと、休みのために大学の食堂が閉まっていて近くに食堂がないという点を除けば、まずまずの施設だといえよう。

二人用の部屋で、二段ベッドがあって、机、椅子、本箱、洋服ダンスなどが二つずつ揃って

---

(1) ヤングスタウン州立大学について、詳しくはそのウェブサイト<http://www.yu.edu/>を参照。

(2) ヤングスタウン州立大学労働者階級研究センターについて、詳しくはそのウェブサイト<http://www.as.yu.edu/~cwcs/>を参照。

いる。テレビ、電話、電気スタンド、冷蔵庫、バス、トイレなどはなく、トイレとシャワーは共同になっている。何ととっても、一晚20ドルちょっとと安いのが助かる。「大会」の期間中、ここで4泊した。

### 労働者階級研究大会 - 初日と2日目

開会のセレモニーは16日夜の7時半から始まった。開会の基調演説を行ったのはジェニファー・ゴードンという女性の弁護士で、表題は「階級意識：移民労働者と教育から行動への道」というものだった。ニューヨークでの移民労働者への教育活動を例に、大衆教育の重要性を強調するもので、特に、「revolutionary times」とは異なって「ordinary times」においては、経験の類似性を基礎にした大衆教育によって批判的意識が形成され、社会的・政治的運動などの行動へと導かれていくというのが、彼女の主張である。

大会2日目は、朝8時半から10時まで分科会が開かれ、10時15分から12時まで全員が集まって、Alessandro Portelliというローマ大学のアメリカ文学の先生による基調演説が行われた。12時から1時までは昼食時間で、1時から2時半、2時24分から4時15分、4時30分から6時まで、3回連続で分科会が開かれた。

午前の最初の分科会「Union Organizing and Worker Identity: Then and Now」での報告が3つ、「Oral History and the Complexities of Working-Class Experience」という基調講演が1つ、午後の最初の分科会「Class, Unions, and Institutions」で報告が3つ、次の分科会「Nationalism and Internationalism: Class, Identity, and Worker Movements」で1つ、最後の分科会「Marxism and Working-Class Studies」で4つという日程だった。

長短あわせて全部で12の報告を聞いたことに

なる。各分科会の参加者は、20~30人くらいである。分科会は一度に4~7つ開かれるから、この数によっても参加者は増減する。

この日4つ開かれた分科会の中で最も興味深かったのは、最後の「マルクス主義と労働者階級研究」についての分科会である。参加者が次々に詰めかけ、60人くらい入る部屋がほぼ一杯だった。このような分科会が開かれる大会に、フォード財団が資金援助をしているというから驚きだ。お金を出しても口を出さない懐の深さということだろうか。

この分科会で、私は最初に手を挙げて質問した。まず始めに日本から来たことを言い、「大原社会問題研究所は日本で一番多くのマルクス関連資料を持っている」と宣伝して、概略「アメリカではマルクスは死んだものと思っていたが、ここに生きていることを知り、驚くと共に嬉しく思う。マルクスへの関心は今もなおあるということなのか、それとも再び生じたということなのか。その主な理由と背景についても教えてもらいたい」と質問した。

時間がなかったため、報告者たちはこれに直接答えず、会場からの意見が求められた。その中には、アメリカにも階級があり階級闘争があるからマルクスは有効だ、社会分析と根本的な変革の手段としてのマルクス主義の有用性は失われていない、クリーブランドに共産党の書店があるから、そこに行って本でも買ったらどうかなどというのもあった。

途中で、「今までの回答で納得したか」と聞かれ、「OK」と言ったが、実は、納得していなかった。すでに予定時間をオーバーしていたので、新たな質問はせず、自制したわけだ。

この後、レセプションが予定されていたので、会場を移動した。その途中、報告者の1人に、納得しなかった点について質問した。それは、アメリカにおけるマルクス主義への関心は持続

しているのか、それとも新たに高まっているのか、という点についてである。

彼の答えは、基本的には持続で、傾向的には減少しているというものだった。今日の分科会には沢山集まったけれど、それはマルクスに関心を持っている人がこの大会に集まっているからで、新たに関心が高まっているわけではないと言う。

彼は、マルクスに関心を持っている人は、大学関係の研究者を中心に全米で2000人くらいではないかという意見だった。これは少し控えめに過ぎるように思われるが、実際にはそうなのかもしれない。

### 労働者階級研究大会 - 3日目

さて、5月18日も、前日同様、午前中の最初の分科会「Fighting Inequality」、午後の1番目の分科会「How Class Works」、2番目の分科会「New Work from Some of the Field's Newest Members: New Perspectives on Gender, Work, and the State」、3番目の分科会「Class, Ethnicity, and Society」で、いずれも3本ずつの報告を聞いた。合計で12本の報告を聞いたことになる。

この他に、10時15分からお昼まで、全員が集まって「Plenary: Building Working-Class Studies」が開かれた。ここでは、この企画の中心になっているヤングスタウン州立大学労働者階級研究センターのジョン・ルッソJohn Russo氏の司会で、6人が5分ずつ各地の大学や研究プログラムの活動の紹介を行った。

この中には、私が以前訪れたウェイン州立大学や、これから訪れる予定のメリーランド大学からの報告も含まれていた。ウェイン州立大学からの人とは、後で言葉を交わした。

この日も最初の分科会で質問した。3番目の報告「What does it Mean to Win?」の中で、

ハーバード大学での「リビング・ウェイジ」キャンペーン（「生活賃金」運動）の「勝利」が触れられたからである。最初の報告で大学での運動が取り上げられたので、ハーバード大学での「生活賃金」運動についてどう評価するのか聞こうと思っていたら、3番目の報告の中で具体的な言及があったというわけだ。

質問の内容を変えて、「もちろん日本にも学生運動はあるが、学生が政治的な課題でも自分たちの要求でもなく、労働者の要求を直接取り上げて運動することはありません。アメリカでは、このような運動の例はこれまでも沢山あったのでしょうか?」と聞いた。答えは、このような運動はこれが初めてではないというものだったが、ずっと以前からあったのか、それとも最近になってからなのかについては、判然としなかった。私が聞きたかったのは、いつ頃から、何故、このような運動が取り込まれるようになったのかということである。

この時、フロアーから手が挙がり、ウェイン州立大学にも同様の運動があったと指摘する人がいた。昨日のマルクス主義についての分科会で、私の質問に答えてくれた人である。会議が終わってからその人の所に行き、「昨日も今日も私の疑問に答えてくれてありがとうございます」とお礼を言った。すると、「ボストンから着たのかね」と聞く。

「そうです。ハーバード大学のライシャワー日本研究所からです」と言って名刺を渡したら、「おやおや、ライシャワーかね」と言って、ニヤリとした。この人はボストンから来た中学校の先生だそうで、彼の意見では、このような学生運動はここ数年のことで、AFL・CIOでスイニー執行部が誕生して学生への働きかけを強めた影響ではないかということだった。

この分科会の2番目の報告も興味深いものだった。それは、職場での「反共産主義」につい

ての報告である。このような報告が、ここアメリカの研究大会でなされるということ自体が、私にとっての新しい発見だった。日本でも、研究者中心の集まりで、このような報告がなされたことはあまり記憶にない。

報告者は、職場での「反共産主義」が労働者階級を分断するための手段として用いられていることを指摘し、企業からの共産主義者の排除のためにCIAによる盗聴やウェブ・サイトの監視、ブラックリストの作成などがなされていると述べた。すると、報告者の前にいた聴衆の一人が、ここにも盗聴器があるんじゃないかという机の下をのぞき込み、場内、大爆笑となった。

この報告についても、私は「CIAのスパイがこの中にもいる可能性についてどう思うか」と質問したかった。しかし、それは止めた。「一番怪しいのはお前だ」と言われたら困ると思ったから……。

#### 労働者階級研究センター (CWCS) の訪問

午前最後の集まりが終わったとき、司会をしていたジョンさんを捕まえ、自己紹介をして大原社研のパンフを渡し、労働者階級研究センター (CWCS) の事務所を訪ねて話を聞きたいという希望を伝えた。

私のことは知っていたようで、「ああ、いい

ですよ。ヤングスタウン産業労働歴史センター Youngstown Historical Center for Industry and Laborに午後6時半でどうですか」と、二つ返事で約束してくれた。約束の場所から自動車に乗って連れて行かれたのは、昨日の狭いレセプション会場だった。

「あれ、ここは昨日の?」「そうです。レセプションの場所で、ここがセンターの事務所です。」「なーんだ、そうだったんですか。ここですか。」

ここで色々話を聞かせていただいた。意外に思ったのは、一つには、「労働者階級」という捉え方は、労働者に関わる諸問題をできるだけ広く取り扱うためのものだという事、もう一つは、アメリカ人の意識の中では自分を「労働者階級」だと認識する人が、「中間階級」だと認識する人と同じ位(46~47%)いるということである。どちらも、日本の場合とはかなり異なっている。そして、ここに、「労働者階級研究」がアメリカでかなり広い基盤をもって成立する条件があるということだろう。

さらにもう一つ付け加えると、ここでの「労働者階級研究」は、労働者階級の生活や文化、文学や芸術、教育などを含む幅広いものであり、経済社会的なレベルでだけ捉えられているわけではない。今回の大会のプログラムにも詩の朗読などがあり、この幅の広さは反映されている。



CWCSの建物



CWCSのジョンさん

ジョンさんの話の中にも、スイニー執行部の評価が出てきた。この労働者階級研究の大会も、スイニー執行部の成立と軌を一にしており、1995年から「再開」されたと言う<sup>(3)</sup>。

「再開」というのは、1930年代に一度大学の主催で開かれたことがあり、その後、長く開かれなかったからだそう。それは何故ですか」と聞いたら、その経緯について詳しいことはここに書いてあると言って、一冊の本をくれた。それは、Janet Zandy編の“ What We Hold in Common : An Introduction to Working-Class Studies ” という本である。大会のポスターもあると言うので2枚もらってきた。研究所に持ち帰って、先の本と一緒に保存している。

### ヤングスタウン産業労働歴史センター

午後7時30分からヤングスタウン産業労働歴史センターで、特別プログラムの詩の朗読が予定されていたので、そちらに戻った。途中、車から降りたジョンさんは谷になっている町の方を指さし、「この辺一帯に製鉄工場が林立していたんですが、今ではすっかりなくなっていました」と言った。

ヤングスタウンの製鉄工場は、1970年代の中頃から次々に姿を消していったそう。1980年に日本の鉄鋼生産量はアメリカを追い越したが、その影には、競争に負けたここヤングスタウンでの廃業もあったわけである。

詩の朗読が始まるまでの時間を利用して、ヤングスタウン産業労働歴史センターを覗いてみた。さすがに、かつての鉄鋼の町である。鉄鋼労働者を主体にして、その労働と生活についての展示になっている。

日本ではほとんど知られていないヤングスタウンという小さな町でも、このような展示施設

があるということに感心させられた。「産業労働歴史センター」というこの施設の名前も独特である。筑豊や足尾などの一部を除いて、類似の施設は日本にはほとんどないだろう。

しかし、これはこの町の形成史からすれば当然のことなのである。この町の歴史は、もともとジョン・ヤング John Young という人が Western Reserve Land Company という土地会社から1万5000エーカーの土地を購入したところから始まる。ヤングの作った町だから、ヤングスタウンである。

こうしてヤング氏がここにやってきたのが1797年で、その後、この地で鉄鉱石が発見されたために鉄鋼業が栄え、「アメリカのルール」とまで言われたそう。したがって、町の歴史は鉄鋼業の歴史であり、町に生きる人々の歴史は鉄鋼労働者の歴史にほかならない。

日本には小さな田舎町にもお城や古い屋敷などがあり、そこに郷土資料館があるように、ここには「産業労働歴史センター」があり、武士の甲冑の代わりに鉄鋼労働者の労働と生活の用具が展示されているわけだ。このようなところにも、日本とアメリカの歴史の違いが反映されているのではないだろうか。そしてそれは、産業や労働に対する両国の人々の意識にも微妙な影響を与えているように思われる。

### 労働者階級研究大会 - 4日目

5月19日は、午前中の9時から12時までワークショップがあった。午後は分科会「Social Justice and the American Worker」ともう一つの分科会「House Marxist, Field Marxist : Cooperation, Contention, and Camaraderie」の二つに出た。

その後2時間ほどおいて、7時から

---

(3) その後、大会は97年、99年、2001年と、2年毎に開かれている。私が出席したのは2001年の第5回大会である。

「Literature of and by the Working-Class」が予定されており、9時から「CLOSING PARTY」となっている。

朝の日差しを浴びて大学に向かった。何だか車が多いような気がしたが、この日は大学の卒業式が行われるからである。卒業生らしき人たちが角帽とガウンをもって、続々と会場の建物に集まってくる。

さて、この日の午前中は「ワークショップ」ということで、いくつかの班に分かれて大学から外に出かけた。一番人気があったのは監獄ツアーで、早々と締め切られた。私もこれに心が動いたが、ここは本来の目的を考えて一般組合員の鉄鋼労働者から話を聞くツアー「Rank-and-File Unionism : First Hand Look at the Ad Hoc Committee of Black Steelworkers, Steelworkers Fight Back, and Women of Steel」の方に参加した。

会場まで大学の車で移動するので、集合場所になっているセンターの建物まで行った。鉄鋼労働者の話を聞くツアーはあまり人気がなく、私を入れてたったの7人である。直ぐにバンに乗って出発した。会場は、Sam Camens Centerというところで、引退した組合員の親睦施設だという。中には会議室や食堂、ピリヤード場などがある。その会議室の一つで、鉄鋼労働者6人の話を聞いた。

人数が少ないので嫌な予感がしていたが、この予感的中し、最初に参加者が自己紹介をすることになった。私も大原研究所の紹介や自分の専門、こちらでの活動などについて、少し長めに話した。この後、再び車に乗ってセンターまで戻り、近くのカフェで一緒に昼食を摂ったが、卒業式の後とあってお客が一杯だった。

午後の最初の分科会「Social Justice and the American Worker」に出たら、聴衆が4人しかいない。そのうち1人出ていってしまった。こ

れは質問せざるをえないと思い、報告しているうちから考えていた。案の定、質問がとぎれたところで司会が私の方を向いた。

私は、日本では労働運動の中で社会的正義という言葉が語られることはほとんどない。日本から来てこの用語にしばしばお目にかかるのは大変新鮮だが、社会的正義という考え方と労働運動との関連についてどう思うか。このような用語が用いられるのは、アメリカ労働運動における宗教的な伝統と何らかの関連があるのかと質問した。

この質問への回答は、宗教的な伝統との関連はあり得るが、それだけではなく社会的文化的な背景が重要だというもののようだった。というのは、早口で長々と説明されたので、良く聞き取れなかったからだ。分科会が終わったら報告者がやって来て、先ほどの質問は大変的を射たものだったと誉めてくれた。しかし、質問がポイントを突くと、一生懸命に答えようとするので早口で長い説明になりがちだ。その結果、付いていけずどのような回答だったのか良く分からない。これは大きな矛盾である。

この分科会が終わって、次の会場に向かった。部屋に入って驚いた。昨日知り合いボストンで連絡を取り合うことを約束した人が、正面の机に座っていたからだ。プログラムを見たら、間違いなく彼の名前が書いてあった。

この分科会「House Marxist, Field Marxist : Cooperation, Contention, and Camaraderie」もマルクス主義という用語が冠せられている。アメリカに来て、これほどマルクスの名前やマルクス主義という用語を聞くとは思わなかった。参加者の一人にこのような感想を言ったら、「でも、これは狭い世界だ」という答が返ってきた。マルクスに関心を持つ人たちが集まってきたが、この程度しかいないということのようだ。かなり、醒めた返答である。

## 閉会パーティー

分科会が終わって、ぶらりと展示の部屋に顔を出してみた。ポスターやTシャツなどを販売している一角に、来るときリムジンで一緒だったりカルド君がいる。「ここで何をしているの?」と聞いたら、これらの商品を販売しているのだそうだ。彼はポスターなどを製作・販売する8人のグループを作っており、そこで絵を描いていると言う。

分科会などでもあまり顔を合わせなかったのどうしたのかと思っていたら、ここで、ポスターを売っていたわけだ。どうりで、顔を合わせないはずだ。

夜9時から閉会パーティーである。レセプションの時より広い部屋で開かれた。昨日から今日にかけて、色々な人から声をかけられるようになった。このパーティーでも、話しかけてくる人がある。分科会などで発言したのが効いたのだろうか。その後も、自己紹介したり、質問したりしたから、私がこの大会に参加している唯一の日本人であることが知られたのだろう。

それに、参加者の規模は150人位で、4日間も一緒にいると自然に顔見知りになる。私の顔も覚えられたようだ。このパーティーではヘルムボールドという方から日本語で声をかけられたが、日本語は挨拶だけで後は英語だ。日本に一年いて津田塾大学と日本女子大学で教えていたそうだ。

もう一人、ワットさんという方からも話しかけられた。彼女はマサチューセッツ州アムハーストにあるスミス・カレッジから来ていると言い、大原研究所について聞いてきた。私が、戦前からの労働運動や労働組合、マルクス関係の

資料などを集めている、日本で一番古い民間のアーカイブだと紹介すると、それならスミス・コレクションを訪問するべきだとすすめる。

ここは、ソフィア・スミスという人が集めた女性運動などのコレクションで、もし来るなら案内してあげると言う。この隣にあるマサチューセッツ大学アムハーストには、以前から訪問の計画があった。その近くにはスミス・カレッジを含めて5つの大学や高等教育機関があるといい、1泊したらどうかと言われた。どうやらガイドしてもらえそうだ。

この労働者階級研究大会は、偶然、ウェブサイトで見つけたものだったが、大きな収穫があった。何人かの人に大会の感想を聞かれたが、私の答えは「この大会に参加して、もう一つのアメリカを発見することができた」というものである。

色々な人に出会い、これからの調査や訪問に結びつくものもあった。中心になってこの大会を準備した労働者階級研究センターのジョンさんとの出会いも貴重なものだった。彼は、ハーバード労働組合プログラムのコーディネーターであったエレインさん<sup>(4)</sup>とも知り合いで、労働史関係文書館の国際団体であるIALHIのことも知っていた。

彼は、できれば日本を訪れたいと言い、私は「是非日本にお出で下さい。来ることができれば、大歓迎します」と答えた。最後の夜、パーティー会場を出るとき、「この次は日本でお会いしましょう」と挨拶をして別れた。これが本当に実現し、日本で再会できると良いのだが...

(以下、続く)

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授)

(4) エレイン・バーナードは、97年に開かれた第3回大会で講演している。http://www.as.yzu.edu/~cwcs/Outresch.html 参照。